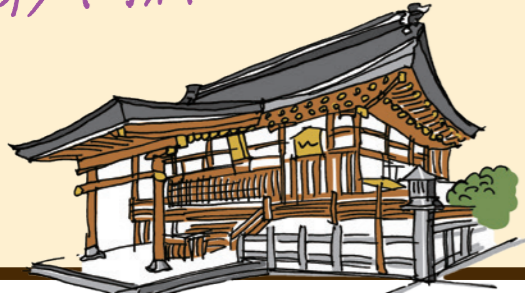


昔も今も河内の大名所、  
枚岡神社へ行こう。

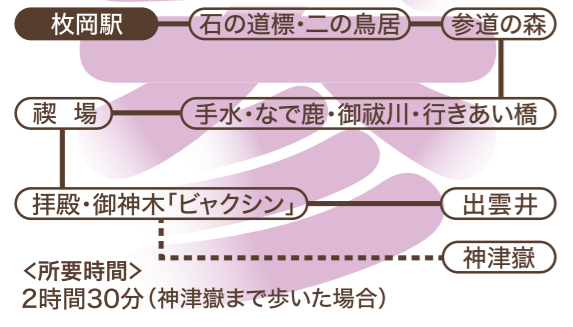


## 東大阪散策MAP

ほんど あきら  
古地図研究家・本渡章さんと  
すえ  
『河内名所図会』を歩く

# 枚岡神社

### コース



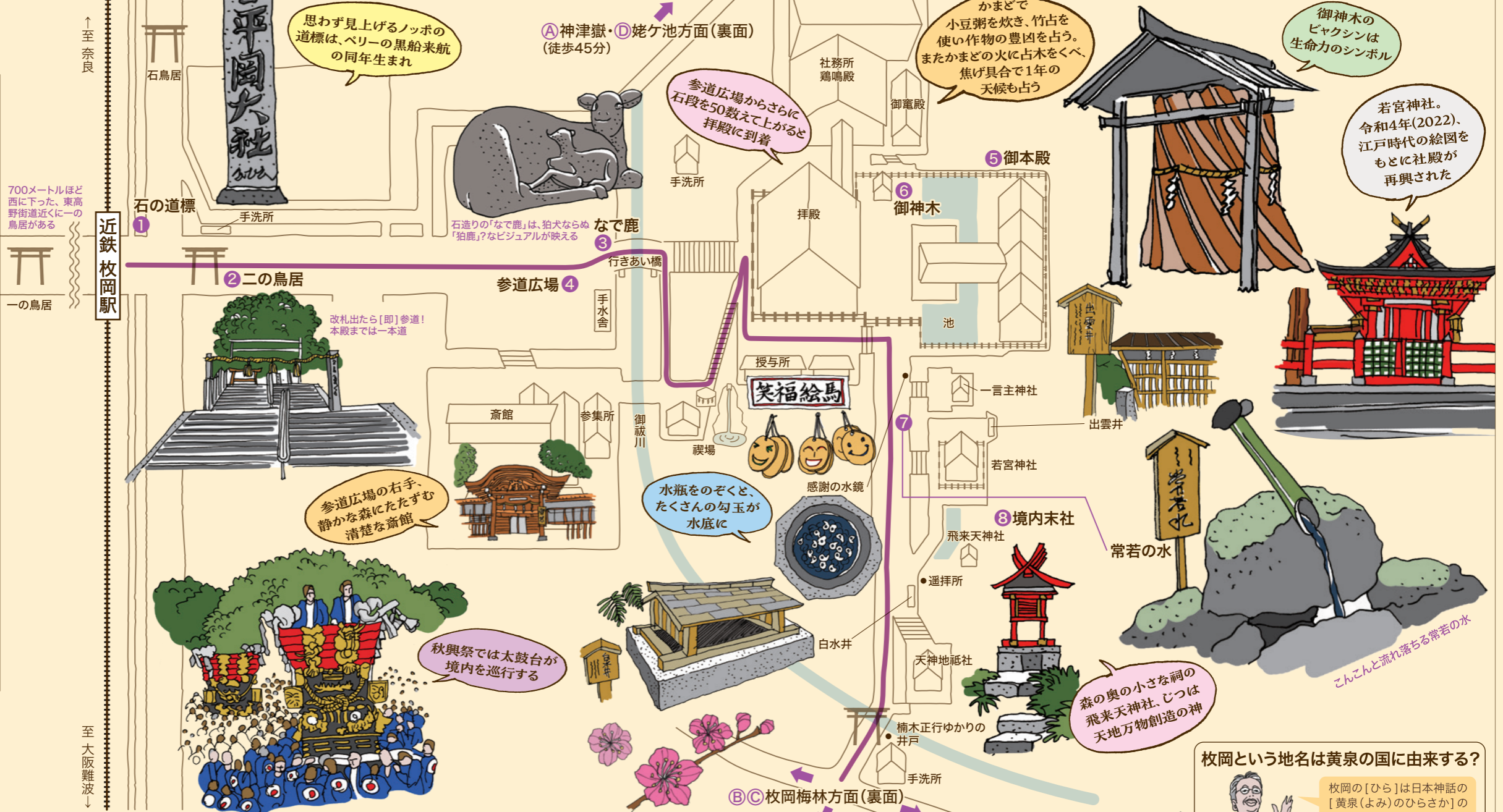
生駒山麓のひとひらの岡が地名になって枚岡と呼ばれ、その地に日本の国づくりの神話ゆかりの神津嶽が生まれました。大和朝廷の歴史ともつながる歩みから枚岡神社は創始され、後には河内の国の一之宮として広く知られるに至ります。天正7年(1579)、織田信長の兵火に焼かれた本殿は、慶長7年(1602)に豊臣秀頼が復旧。江戸時代には河内屈指の名所になり、数々の絵図に描かれました。枚岡神社はその後も変遷を重ねて、境内には今も新たな魅力がいっぱい。知れば知るほど楽しみが増す枚岡神社は、近鉄奈良線枚岡駅の目の前でアクセスも便利。マップ片手にぜひ散策を!

**① 石の道標が駅前で道案内**  
枚岡駅前の名物、大きな石の道標はもともと近くの宝幢寺(ほうとうじ)門前の辻にあったもの。建立は幕末の嘉永6年(1853)で、現在地に移されてからも「右大坂 左なら」と往來の道案内をつとめている。横面に刻まれた寄進者名の中に「車屋」「針金屋」とあるのは、東大阪の伝統地場産業「伸線」の元祖だろうか。こちらの石の道標も⑤の「なで鹿」も、日下の石工・小平次(せひら)の作だ。

**② 三つの鳥居に見守られ**  
駅前から仰ぐ石段の上に建つ「二の鳥居」は、目にするすがすがしい檜造り。平成から令和の大造営で再建された。線路を隔てた西側の鳥居町には享和年間(1801~4)建立の石造り「一の鳥居」があり、こちらが参道のはじまり。かたわらの石燈籠には貞享2年(1685)の銘が彫られている。鳥居はさらにもうひとつ。石の道標から北側の道筋をまたぐ大きな石鳥居は昭和15年(1940)、皇紀2600年を記念しての造営だ。見た目も年代もそれぞれの3つの鳥居が、行き交う人を見守っている。

**③ 参道の森で神の使いの鹿がお迎え**  
枚岡神社の境内は生駒山麓の緑の中にある。古木を仰ぎ、石段を上り、石畳を踏み、参道広場へ。「行きあい橋」のたもとで「御祓川(おはらいがわ)」のせせらぎに耳を澄ましてみよう。手水舎で水を落とす青銅の鹿、橋の左右のたもとに座す石造りの「なで鹿」は、枚岡神社と春日大社(奈良)の深い縁のしるし。鹿は春日の神の使いだが、春日の神とははじめ枚岡神社に祀られ、その後春日大社でも祀られるようになった天兒屋根命(あめのこやねのみこと)と比売御神(ひめみかみ)のこと。枚岡神社が元春日とも呼ばれる由縁だ。参道広場の右手に見える齋館(さいかんと)は神事の前に身を浄める場所。拝殿の右手には流れ落ちる水でみそぎを行う禊場(みそぎば)がひかえ、おごそかな静けさを漂わせる。

**④ お笑い神事でさわやかに福を呼ぶ**  
メディアでもたびたび紹介されて有名になった師走恒例、12月23日のお笑い神事。宮司の先導で「アッハッハー」と三度笑った後、神職、巫女、一般参集者がいっしょになって20分間笑い続け、一年のわざわいを吹き飛ばして福を招き入れるというもの。参道広場に響く賑やかな笑いを収めた映像はネットでも公開され、多くの方に元気を届けている。正式名は注連縄掛(しめかけ)神事で、当日の朝、新しい注連縄の張り渡しが行われる。枚岡神社の祭神が祈りと笑いによって天の岩戸を開き世に光をとりもどした神話に登場することから、お笑い神事と呼ばれるようになったのだとか。神事のあとの笑いにまつわるパフォーマンスや餅つき大会、出店などもお楽しみ。お笑い神事には「笑福守(1,000円)」で参加できる。



**⑤ 神話と古代史を彩る本殿の神々**  
枚岡神社の格式は高い。中世には河内国の一之宮に定められて河内を代表する神社になり、明治時代は全国で29社しかない官幣大社にも数えられた。ルーツは神武天皇が日本の国を平定する戦いにのぞんだ時、天兒屋根命(あめのこやねのみこと)とその后(きさき)の比売御神(ひめみかみ)を祀った故事にさかのぼる。天兒屋根命は河内の国を本拠に大和朝廷の祭祀をつかさどり、日本史に名高い藤原氏・中臣氏の祖先にあたる神。はじめは神津嶽に祀られ、白雉(はくち)元年(650)に現在地に移された。後に、出雲の国ゆずりの神話で活躍した経津主命(ふつぬしのみこと)と武甕槌命(たけみかづちのみこと)の2神を加え、今は本殿

に天兒屋根命・比売御神とともに4柱の祭神が祀られている。枚岡神社の神々は日本の誕生とゆかりが深く、格式の高さもうなずける。

**⑥ 御神木は千数百歳**  
本殿の手前に見えるのは御神木のビヤクシン。神武天皇が神津嶽でお手植えし、現在地に神社が遷った時には大木となっていたため、枝を切って挿し木で当地に引き継いだ。ビヤクシンはヒノキ科の常緑樹。うっそうとした緑を繁らせ、昭和13年(1938)に大阪府の天然記念物に指定されたが、同36年(1961)の第二室戸台風で傷つき、昭和40年代にやむなく一部を伐採。周囲6.5mの隆々とした切株が覆い屋根で保護して大切に残されている。

**⑦ 生駒の清水が湧き出でるところ**  
生駒山麓の湧き水は自然の恵み。感謝の気持ちを神の祭りとして分かち合う水神祭が、令和5年(2023)から境内の摂社・若宮神社ではじまった。祭神は天兒屋根命の子で水神の天雲根命(あめのくもねのみこと)で、高天原(たかまがはら)の清水を地上にもたらした神。飲料水の神ともいわれ、若宮神社の奥の「出雲井(いずもい)」の井戸から引いた「常若(とこわか)の水」が参拝の折りに手を清められるのがうれしい。近くに「白水井(はくすい)」もあり、こちらの水は触れると眼病が改善し、母乳がよく出るといわれているのだとか。摂社・末社と出雲井・常若の水・白水井、3つの神水が並ぶ道で「感謝と祈りの道」と枚岡神社では呼んでいる。

**⑧ 神々が集う境内末社**  
末社の飛来天神社は天地万物創造の神、天神地祇社は天津神(天上の神々)と国津神(地上の神々)、地主神(氏子の神々)を祀る。天神地祇社には明治初めまで境内にあった19の末社も合祀された。枚岡は八百万(やおよろず)の神々が集う場所。地域に深く根ざした信仰のよりどころにもなっている。もうひとつの末社、一言主神社は『古事記』に現れた「善いことも悪いこともひと言で言い放つ一言主神(ひとことぬしのみかみ)」が祭神で、その神力は雄略天皇も恐れたと記されている。その名にちなんだ一言願札は、ひと言で願いをすればかなうといわれ、かなった時には一言願札についている勾玉を切りとって、一言主神社の前の石の水瓶(みずがめ)に納める。

**枚岡という地名は黄泉の国に由来する?**

枚岡の[ひら]は日本神話の[黄泉(よみ)のひらさか]の[ひら]ではないかとも思っています。

ねぎ  
<枚岡神社の禰宜>  
山根真人さん

「黄泉」は日本神話でイザナギノミコトが亡くなった妻のイザナミノミコトに会いに行く死後の国。「ひらさか」はこの世と黄泉の境にあたる場所。黄泉は出雲の国(島根県)にあるとされ、枚岡神社の現住所は東大阪市出雲井町で、境内には神水が湧く出雲井の井戸があります。禰宜さんのひと言に、神話の世界での枚岡と出雲の深いつながりを想像しました。

本渡章さん

# 江戸時代版パノラマ図!

## 『河内名所図会』で知る 枚岡神社の魅力と今昔。

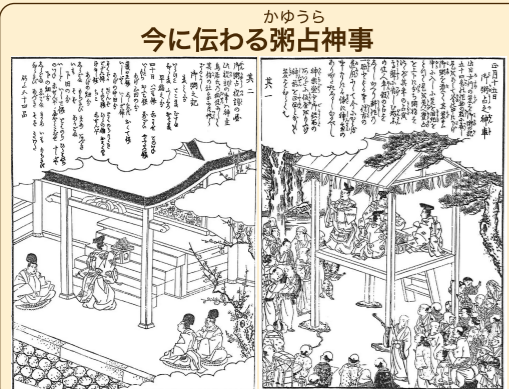
橋を渡り、鳥居をくぐり、石段を上って本殿へ、境内に連なる摂社・末社へ。「河内名所図会」で生駒山に抱かれた枚岡神社を空から一望してください。神話と古代史をつなぐ神々が鎮座する境内の眺めから、河内の歴史物語が見えてきます。現在の枚岡神社は、図の神宮寺が梅林になり、新たな堂宇も加わって、四季の風景も時代とともに移り変わってきました。一方で変わらない年中行事も多く、地域の暮らしに溶け込んでいます。創建の地、本宮神津嶽参りの山道を登る参拝者もあとをたちません。

「河内名所図会」は江戸時代に大流行した名所ガイドブックのひとつ。風景や風俗、年中行事を描いた絵が面白く、居ながら旅気分が楽しめます。境内を見守るうっそうとした森は今もそのまま。本殿の左手前でひときわ幹周りの太い神木のビャクシンも残され、悠久の時の流れを語っています。マップを広げ、現地を歩き、河内を代表する名所、枚岡神社の今昔を感じてください。

### 枚岡神社年間スケジュール

12月23日	10月15日	スポーツの日	8月第4日曜	6月30日	5月5日	4月29日	1月15日
注連縄掛神事(お笑い神事)	秋郷祭本祭	秋郷祭前祭(神幸祭 太鼓台宮入)	秋郷祭前祭(太鼓台宮入)	秋郷祭前祭(太鼓台宮入)	夏越大祓	小太鼓祭	若宮水神祭
			枚岡燈明祭				粥占神事

### 主な年中行事



粥占神事は農作物の出来具合だけでなく、田植えの時期なども占い、農家のみなさんに参考にしていただいています。準備がなかなか大変ですが、今でもほぼ古式のとおりにとりおこなっています。

現在行われている粥占神事の竹の数は53本になったそうです。神事の厳粛な雰囲気は枚岡神社のサイトで公開されている動画からも感じとれます。



### 井原西鶴の短編に登場「姥ヶ池」

枚岡神社の参道から山道を登ると、右側の脇に木立に囲まれた小さな池が。「姥ヶ池」と書かれた案内板には、今から600年ほど前、暮らしに困った老婆が枚岡神社の御神燈の油を盗んでは売っていたのが人々に知られ、いたたまれなくなって、この池に身を投げたとある。以来、雨の夜には池に青白い炎があらわれたとか。この話は後に井原西鶴が短編に脚色し、『西鶴諸国断』におさめたことでも知られている。

「河内の枚岡村にいた家柄も器量もよい女がいて、どういうめぐりあわせか、夫婦になった男が次々早死にして11人を数え、18歳になってからは後家暮らし。88歳になって木綿糸をつむぐ内職でなんとか食いつないでいたが、灯りにする油を買えず、夜なべ仕事ができない。困って枚岡神社の御神燈の油を毎夜盗んだ。見つけた神官が油泥棒を弓で射ると、山姥(やまんば)となった老婆の首が飛び、口から火を吹いて空に舞上がった。以来、火を吹く首が夜な夜なあらわれ、人々をふるえあがらせたが、「油さし」と言ううち消えてしまうのがおかしかった」西鶴の筆で、老婆の悲話は山姥の奇談に生まれ変わり、今に伝えられている。

### 大阪の今と昔に思いをめぐらす展望台

生駒山麓に広がるのびのびとしたロケーション、そこから見下ろす展望も枚岡梅林の大きな魅力。大阪を一望できるポイントは、貞明(ていめい)皇太后陛下御台覧之地の石碑が建っている場所。昭和2年(1937)、大正天皇の後だった貞明皇太后が枚岡を訪ね、この地から『日本書紀』に記された神武天皇の足跡をしのばれたという。かたわらの石のベンチに座り、緑の向こうに続く市街を見渡して、あべのハルカスなど目じるしになる風景を手がかりに、かつての大阪の風景を想像してみよう。



貞明皇太后の石碑の隣に石のベンチとキャラクター

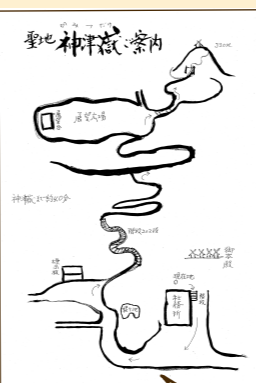
### 神津嶽への山道はパノラマ展望を楽しみながら

枚岡神社のはじまりは、神武天皇が即位する3年前と伝わる。国土の平定を祈願して神武天皇の命で天兒屋根命(あめのこやねのみこと)・比売御神(ひめみかみ)の2神を祀った地が神津嶽。祈願がかない、大和の橿原に入った神武天皇は、初代天皇として即位を果たした。神津嶽から山麓の現在地にうつつたのは白雉(はくち)元年(650)のこと。その後の神津嶽は枚岡神社本宮と呼ばれ、生駒の霊地となっている。

今、神津嶽には「枚岡神社創始之地」の石碑が建ち、枚岡神社境内から創始の地まで徒歩約40分の山道が続く。202段の石段を上り、高々とびた木々を仰ぎつつ、枚岡山展望台へ。大阪市街から明石海峡大橋まで眼下に広がる眺めのまん中でひときわ映えていたのは、花園ラグビー場の赤いスタンド席。そこから枚岡神社本宮まではもうひと息。やがて木立のなかに石の鳥居が見えてくる。



↑東大阪市内の生駒山ハイキングコースの紹介ページ



枚岡神社境内にある、神津嶽への手書きマップも味わい深くて必見



山道には「枚岡神社創始之地」の石碑が。神津嶽を歩くなら、枚岡神社主催のウォーキングに参加するのもおすすめです



「大阪みどりの百選」碑もあれば「香り100選」碑もある枚岡梅林



姥ヶ池は山道から見下ろす場所にひっそりと

※表面の境内図と併せてご覧ください



### 神津嶽から足を伸ばして 慈光寺へ!

河内名所図会に描かれた名所がもうひとつ、神津嶽から続くハイキングコースにあります。ホトトギスの名所と呼ばれた慈光寺で、図会では月見しながらホトトギスの鳴き待ちをする人々の絵とともに、歌がえられました。「ぬば玉の月さやかなる夜半(よわ)なれば鳴くほととぎすかげもかくれず」。かつて役行者(えんのぎょうじゃ)が生駒山中にいた鬼を捕らえ、髪を切って改心させた伝承から山号は髪切山(こぎりさん)。樹齢200年のカエデをはじめ豊かな緑に抱かれて、本堂、開山堂がたたずんでいます。神津嶽からは約1.7km。山間の道を鳥や虫の声を聞きながら歩いてみたいものです。

### かおり風景100選の梅林、次世代が開花

明治の植樹にはじまり、枚岡神社に集う多くの人々のサポートで大きく育った枚岡梅林。見晴らしのいい境内地に、およそ300本もの梅が咲き誇る様子は、長く親しまれる早春名物。芸能の奉納も行われ、神域の清々しさが漂う花見が楽しまれてきたが、平成から令和にかけて大転換期が訪れた。

梅輪紋ウイルスの広がりや平成29年(2017)に残念ながら梅林は伐採。令和3年(2021)に新たな梅の木約200本が植えられ、かつての風景を取り戻しつつある。今はまだ若い梅ではあるものの、早咲きの品種から順々に春の訪れを告げて開花する姿が楽しめるのだとか。見頃は2月中旬から3月中旬。令和5年(2023)には3月5日に梅まつりの野点(のだて)も7年ぶりに復活し、花を愛で、お茶を味わう風景も見られる。

枚岡公園は平成元年(1989)に府民の投票により「大阪みどりの百選」に選ばれ、梅林と枚岡神社の木立は平成13年(2001)に環境省の「かおり風景100選」に認定されている。次世代が咲く枚岡梅林は花と緑と香りの名所として、令和以後も新しい歴史を重ねていく。



海外でも好評、ハケとブラシが大阪の地場産業だった! 昭和の初めの顕彰碑も梅林の一角に



### 本渡 章(ほんど・あきら)

作家・古地図コレクター。編集者などを経て文筆業に。1996年、第3回バスカル短篇文学新人賞優秀賞受賞。著書『大阪古地図パラダイス』『古地図で歩く大阪ザ・ベスト10』『鳥瞰図!』『古地図でたどる 大阪24区の履歴書』(以上、140B)や『古地図が語る大災害』(創元社)など。他に各地の「名所むかし案内」シリーズなど多数。講演、まち歩きツアー、自ら所蔵する古地図を公開するサロンなどの活動も行っている。

監修/本渡 章 編集/株式会社140B  
イラスト・デザイン/神谷利男デザイン株式会社  
発行/東大阪観光協会 2025年1月